平成 20 年度第 1 回 AA 研フォーラム
日時：平成 20 年 4 月 17 日（木曜日）午後 3 時より 5 時
場所：AA 研 304 号室

# 敦煌文書の性格と由来

今枝由郎（フランス国立科学研究センター，AA 研客員教授）

中国甘粛省のシルクロードのオアシス都市敦煌近くの莫高窟の一石窟から、20 世紀初頭に、中国語を始め、チベット語、サンスクリット語など中央アジアの諸々の言語で書かれた数万点の古文書群が発見されたが、これは中央・東アジア研究にとっての 20 世紀最大の発見である。発見以来 1 世紀にわたる研究の結果、現在「蔵経窟」と呼び習わされるこの石窟の封印時期は、11 世紀初であることが確定できた。しかし、これら文書の由来、性格、封印の状況・理由に関しては、未だに不明な点が多い。

しかし、チベット語文書が中国語文書に次いで数多く発見されていることからして、チベットとの関連が深いことが分かる。まず第一には、「蔵経窟」（17 窟）は、「三層楼」と呼ばれる三階建ての石窟の一番下の 16 窟に追加された小さなもので、本来は呉姓出身の 9 世紀の高僧洪辨の遺影窟であった。三層の内、中層にあたる 365 窟には、チベット語の銘文があり、それによれば、この窟は 832 年から 834 年にかけて、洪辨により開鑿されたものであることが分かる。この時期は、敦煌一帯がチベット（吐蕃）の軍事支配下にあった時代で、洪辨は当時の敦煌仏教界で最も高名な僧侶であった。敦煌文書の中には、彼に関する中国語・チベット語（洪辨は Hong pen と音写される）文書が数多くある。

また、同じくかなりの数の中国語・チベット語文書の中に、法成（チベット語名は Chos grub と音写ではなく意訳されている）という高僧の名前が現れるが、彼もチベット（吐蕃）支配下敦煌で仏典の翻訳に従事したバイリンガル僧であった。彼も、洪辨と同じく呉姓出身であったが、二人の間に親戚関係があったかどうかは明らかではない。

この二人の存在、および彼らに関する文書が、敦煌文書中に突出して多いということは、従来あまり注目されなかったが、これは蔵経窟の性格を語る上で重要な要素であろう。三層楼は、10 紀には呉家窟として知られていたことを考慮すると、元来洪辨の遺影窟として開鑿された蔵経窟には、彼および同じくチベット（吐蕃）支配下の敦煌で活躍した法成という、呉家出身の高僧二人にゆかりのある文書が保管されたのではないかと思われる。その後、他所からの不用文書も徐々に加えられて数万点にまで達し、縦横高さ各々3 メートル程の小さな窟が一杯になった時点で，封印されたのではなかろうか。推測の域を出ないが、チベット関連の文脈から考えられることである。